

題字 新井 光風

# 色紙に書く 座右の銘

中嶋 嶺雄

## 「機不可失」

## 時不再來」

「機失うべからず、時再び来たらず」（チヤンスは逃してはいけない。時間は二度と戻らないのだから）。この単純明快な格言は、激動の現代中国の政治史において、最終的には権力闘争に勝ち抜いた鄧小平が最も好み、自らの政治的信条にした言葉である。その明確な出典は定かでないけれど、秦代の『戦国策』のなかに、「敵不可易、時不可失」（敵易かるべからず、時失うべからず）とあり、また「時不再來」はしばしば格言に登場する言葉なので、鄧小平自

身がここに記したように言い換えたのではないかと思われる。だとすれば、そのこと自体がいかに鄧小平らしいといえよう。鄧小平は権謀術数が渦巻く中国共産党の政治的舞台で三度失脚してまた復権し、最後には「改革・開放」政策を掲げて今日の中国社会の発展に指針を与えた指導者であるが、毛沢東や周恩来のように学識を表明するような人物ではなかった。「勤工儉学」の苦学生としてフランスに留学したものの学歴はそれだけで、彼の政治信条は単純で

あった。その単純さが彼を最終的な勝利に導いたのだといえよう。一九六六年夏に始まった文化大革命では劉少奇国家主席とともに実権派の領袖として失脚したが、一九七三年には副総理として復権。周恩来死後の一九七六年四月の第一次天安門事件では「走資派」として再失脚、同年九月の毛沢東死後、北京政変で「四人組」を逮捕して権力を握った華国鋒主席を追放して三度目の復活を果たした。九〇年代初頭からは保守派の抵抗を抑えて「改革・開放」政策を



中嶋嶺雄（なかじま・みねお）  
国際教養大学理事長・学長。1936年（昭和11）長野県松本市生まれ。東京大学大学院社会学研究科修士。社会学博士。国際社会学会。東京外国語大学学長、国立大学協会副会長、文部科学省中央教育審議会委員、内閣教育再生会議委員、オーストラリア国立大学、パリ政治学院、カリフォルニア大学サンディエゴ校大学院客員教授などを歴任。「中国」「北京列強」（サントリー学芸賞受賞）「なぜ国際教養大学で人材は育つか」など著書多数。2003年度「正論大賞」受賞。

推進した。その鄧小平は結局毛沢東同様の「赤い皇帝」となり、中国社会の民主化に

は対抗して一九八九年六月の「血の日曜日」第二次天安門事件では市民や学生への銃撃

を命じた。

このような鄧小平に関して、私は貴重な経験をしている。それは一九六六年十一月十二日、北京の人民大会堂で「孫文生誕百周年記念大会」が開かれたときのことである。

孫文の革命には日本人が支援したというので、私たち日本代表团は最前列に席を与えられていた。壇上には周恩来首相や孫文夫人の宋慶齡国家副主席ら錚々たる要人が並んでいるのに、肝心の劉少奇国家主席や鄧小平総書記の姿がない。と訝っているところ二人が舞台の右手から遅れて登壇したのに全く拍手が起ころなかった。私はその瞬間にこれが実権派打倒の文化大革命なのだと思ったのだが、大会が始まると孫文生誕百周年記念はそっちのけで、周恩来まで「毛主席万歳！ 万々歳！」を絶叫していた。そのときの鄧小平の姿を忘れることができないが、「いまに見ている」という表情で周恩来をにらめつけていた。

機不可失  
時不再來



中嶋御雄



心 技 体 人を育てる総合誌

人間国宝をたずねて

〈地歌〉 富山清琴

色紙に書く座右の銘

中嶋嶺雄

武道の可能性を探る

大久保治男

# 武道

好	武道のすすめ	鳥居泰彦
評	私の指導法・相撲	舛田 守
連	日本の心・やまところ	加来耕三
載	技を磨く	内藤國雄
	脳を活性化する	有田秀穂
	弓道—その歴史と技法—	松尾牧則
	役に立つ少年柔道指導法(最終回)	向井幹博

シリーズ 中学校武道授業の充実に向けて・銃剣道——全日本銃剣道連盟  
マンガ・武道のすすめ《神道夢想流杖術・波止成徳》——田代しんたろう





**体育学を学ぶ。  
人を動かす人になる。**



**国際武道大学**

<体育学部> 武道学科 体育学科 スポーツトレーナー学科 国際スポーツ文化学科